

Z会東大進学教室

高1 東大国語



【問題】(演習)

出典：清水幾太郎『論文の書き方』／成城大学・改

文章略解

美しいが実物は存在しないという言葉があつて、その言葉の魅力が人間の精神の自由を奪うことがある。詩人はそのような美しい言葉に想像力を励まされて、自由に作品を書く。しかし、知的散文を書く人間にとって、言葉は実物を表すために使うのであり、言葉に対して詩人のような態度をとってはならない。言葉に仕えるのではなく、言葉を使わなくてはならないのである。

解答

問1 ①〓瞬間 ②〓格別 ③〓煩 ④〓励 ⑤〓邪魔

問2 ことだま 問3 B〓言葉を使う C〓言葉に仕える

問4 一つ一つがそれ自身生き物であり、人間が言葉を使うと同時に人間を使おうとする言葉の魅力。〔解答例〕

問5 (ア) 問6 精神の自由〔5字〕

問7 (a)〓知的散文を書く人間 (b)〓謙虚で透明な言葉で実物を現わす必要があるから。〔23字・解答例〕

問8 (ウ)

出典：岸田秀『不惑の雑考』「I《過ぎたるは及ばざるが如し》」／成城大学・改

文章略解

ある目的や原則を挫折させる効果的な用法は、それについて、極端に忠実に主張することである。どんなものでも、存在価値やメリットがあるので、それにもかかわらず全面否定することは、かえってわれわれの立場を脆くすることになるのである。

解答

- 問 1 ① 〓 愚 ② 〓 神経質 ③ 〓 癖 ④ 〓 官庁 ⑤ 〓 攻撃

問 2 (エ)

問 3 正論でも通るはずのない主張で軍縮会議を決裂させれば、結局軍縮を行わずにすむから。(40字・解答例)

- 問 4 A 〓 (イ) B 〓 (イ) C 〓 (オ) D 〓 (イ)

問 5 (エ)

問 6 敵のメリットを無視しては、敵を倒すことはできない。(27字・解答例)

問2 出典は『論語』の中の「先進編」の一節である。孔子の門人の子貢が、孔子に、(同じく門人の)子張と子夏とどちらが優れているかと尋ねた際の、孔子の言葉である。「過猶不及」(過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し)。意味は、ゆき過ぎるのはひかえ目でも足りないのと同じようなものである。つまり、どちらも完全ではなく、過不及のない中庸が一番優れているのだ、ということ。かなり有名な言葉なので、知っている人も多かったのではなからうか。知らないときつい、(少なくともイ)、ウを選ぶ人はいないであろうが……)ヒントがなくはない。問題の出典『不惑の雑考』がそれである。孔子の有名な言葉「吾十有五而志于学」^ニ。三十而立^ニ。四十不惑^ハ(私は十五歳で学問に志し、三十で独立した立場を持ち、四十になってあれこれと迷わず)、……『論語』「為政編」に思い当たれば、(エ)が選べよう。

問3 傍線部(b)を含む一文は「たとえば」で始まっているので、それ以前の例示になっていることがわかる。ではその前にどのようなことが書かれているのかと言えば、「過ぎたるは及ばざるが如し」^ニある目的なり原則なりを挫折させるもつとも効果的な方法は、その目的なり原則なりを極端に忠実に主張すること^ニということである。このことを傍線部(b)にあてはめて考えると、「軍縮を挫折させる為には、軍縮に関して極端に忠実に主張(＝即時全面軍備撤廃)すればよい」ということになる。また「建前として軍縮に反対するわけにゆかず」とあるので、ここから周囲は「軍縮することが正しい」という空気にあることが押さえられる。つまり、いくら正論であっても、極端に走ると無理が生じ、結果的には逆効果になる。こう言った内容を上手く四十字以内でまとめてやればよい。

問4 文脈を丹念に辿っていけば、空欄A、B、Dに同じ言葉が入るのは、明らかであろう。Cはその結果、反対の効果となる言葉を入れればよい。さてどのような言葉を入れるのかであるが、ヒントになるのは、前に書かれている、昔の日本軍の暗号文の例と、次に書かれている「知られたところで……情報まで秘密にしよう……、知られては絶対に困る情報を秘密にしておく……」の部分である。ここから、空欄A、B、Dには暗号化するぐらい重要な、あるいは、絶対に知られては困る、という意味に一番近いイが、Cにはその反対の(オ)が入ることがわかるだろう。

問5 まず、これが何についての例なのか考える。するとその直前に「ついでは言えよ」とあるので、その前に書かれている、親

や教師の例と、同類だということがつかめよう。ここでの親や教師の例は、よかれと思っていることが過度になりすぎて、逆効果になっているという例である。このことを、鬱病患者に対する態度にあてはめてみるとどうなるか、考えればよい。

問6 傍線部(c)の直前に「言ってみれば」とあるので、この傍線部はその直前の言い換えだとわかる。そこで、直前の部分と照らし合

わせて傍線部(c)を見てみると、「あちこちにいっぱい砲弾を撃ち込む」は「全面否定」のことを、「敵の本陣」が「メリット」を比喻しているのがわかるだろう。つまり、全面否定の結果、相手のメリットが見えなくなり、その攻撃は意味をなさないものになってしまう、ということなのである。

【添削課題】

出典…市川浩『〈身〉の構造』／法政大学 94年・改題

文章略解

人間の身体は文化や歴史を構造化し内蔵した統合的なものである。この統合には、未来に実現すべき可能的統合も含まれるが、その実現に向けての過程は、必ずしも連続的ではなく、意識的能動的になされてゆく側面と、無意識的受動的になされてゆく側面とがある。しかしそのようにして獲得された統合が習慣化し惰性となると、今度はそれを拒絶する志向が芽生え、それが閉塞した状況を打開する力ともなる。

解答

問1 a

問2 その時代や社会で正常とされる条件を現状では満たさないこと。〔29字〕

問3 統合を容易にする回路〔10字・26行目〕

問4 保守的な意見が支持を集める時代と、改革を訴える意見に人気が集まる時代とが交互に訪れることから分るように、人間は自らが求めた状態に安住できず、むしろ安定ゆえの惰性化が、正反対の志向を産むということ。〔99字・解答例〕

- 問5 (1) 〓 紡 (2) 〓 徐々 (3) 〓 陥 (4) 〓 不可避

特別問題

人間の身体は文化や歴史を構造化し内蔵した統合的なものである。この統合には、未来に実現すべき可能的統合も含まれるが、その実現に向けての過程は、必ずしも連続的ではなく、意識的能動的になされてゆく側面と、無意識的受動的になされてゆく側面とがある。しかしそのようにして獲得された統合が習慣化し惰性となると、今度はそれを拒絶する志向が芽生え、それが閉塞した状況を打開する力ともなる。(186字)

出典…大岡信『肉眼の思想』／オリジナル問題

文章略解

日本画の歴史は美的理念の優位によって貫かれており、そこから見てとれるのは、理念と同時に情緒でもある美的体験にほかならない。西洋絵画が視覚的なイメージに忠実に事物が「どのように見えるか」を追求したのに対し、日本画を含む東洋絵画は自分の眼が見たものではなく、自分の精神が識っているものに忠実であろうとした。その結果、東洋絵画はつねに、ある主体的な理念の象徴という性質を帯びるのである。

解答

問1 美的体験〔4字〕

問2 網膜のリアリズム〔8字〕

問3 日本画の美的理念が筆力より濃淡陰影を旨とすること。〔25字・解答例〕

問4 A 〳ウ B 〳オ C 〳カ D 〳イ

問5 西洋画では画家の眼が見たものだが、日本画では精神的な美的理念の象徴でもある。〔38字・解答例〕

問1 設問内容をよく見て考えなければならない。設問は「南画風」の中に人々が発見したものは何かを問うている。南画風の特徴、特徴でないことに注意しよう。設問にある「みてとった」に着目すれば、同一の表現が11行に「そこに見てとることを求められている」とあることに気づくはずである。ここでの絵画の種類は「南画」ではなく「日本画」であるが、「南画風」を日本人は愛好したのであるから、「南画風」は「日本画」に相通じる点があると判断できる。したがって「南画風」と「日本画」が同類とみなすことができる。すると11～15行で「『日本画』とよばれる絵を眺めて」そこに見てとることを求められているのは、……むしろ、華麗とか余情とか幽玄とかの、理念でもあれば同時に情緒でもある、美的体験にほかならない。」の記述を見出し出すことができる。したがって解答は、ほかならないで強調されている美的体験である。傍線の引かれている前後からのみ解答を発見しようとする単純な思考に陥るのではなく、設問意図を把握することが極めて重要である。

問2 西洋近代絵画は、事物がどのように見えるかを追求するものである。視覚的イメージにどれだけ忠実であるかが重要である。それに対して、東洋の絵画は、自分の精神が識っているものに対して最も忠実であろうとする。前者の関心は物理的なりアリズム(写実主義)である。この特質を最も端的に比喩的に表現している言葉を抜き出せばよい。

問3 なにとなが同じような文脈(傾向)にあるかの理解が先決である。ここでは華中華南の南画風と日本画の雪舟の下絵にすぎない「天の橋立図」が同一の特質・傾向を持つのである。したがって使用する文中の語は南画風について書かれた、物象の形態輪郭は模糊として定まらず、濃淡陰影の変化に満ちている、といったものになる。

問4 空欄補充問題の要諦は空欄の前後に根拠・ヒントになることは決しておろそかにしてはならないことである。空欄Aの場合は直前の「色彩それ自体」の「自体」と関連のある(ウ)の「自律」が入る。空欄Bは直後の「分析・総合」といった科学的概念と結びつく(オ)の「幾何学」が入る。空欄Cは直前の「事物」と同義であり、26～27行にある「精神的」と反対の意味になる(カ)の「物質」を選ぶ。空欄Dは直前の「感情的」と同義表現を選べばよい。

問5 問2とも関連する重要な設問である。西洋画の関心は自分の眼がどのようにリアルに事物を見て、その対象を画布に表現するか

にあるが、日本画において重要なことは物理的リアリズムではなく、精神的な理念である。このことを最も端的に表現している言葉が28行目の「ある主体的な理念の象徴という性質」である。解答するにあたっては西洋画の場合は物質・物理的なものを表象する「自分の眼」を、日本画の場合は反対の性質を持つ「精神的な美的理念の象徴」がそれぞれキーワードになる。簡潔な対比構造の文で書くことに留意しよう。

【問題】(演習)

出典：『十訓抄』巻四 十五 / 藤女子大学・改

現代語訳

寛平の歌合せ(の時)に、「初雁」という歌題を友則(「紀友則」)が、

春霞かすみて……春霞にかすんで去ってしまった雁が、今渡り戻って鳴くようだ、この秋霧の上に

と(いう歌を)詠んだ。(友則は歌合せの)左方であったが、「春霞」という初めの)五文字を詠んだ時、右方の人は、皆大笑いした。そこで(友則が)、次の句に「かすみて往にし」といった時、(右方の歌人たちは歌の真意を知って)静まりかえってしまったという。物事を終りまで聞きもしないで、大騒ぎして笑ったりすることは、あってはならないことだ。また、このように(「初雁」という秋の歌題に対して「春霞」で始めるように)「思いもしないことも、詠むのを慎むべきであろうか。また、ある人が大間違いをしてしまったとしても、自分にとって不都合がないとしたら、むきになって非難し責めたてても、何になるうか(いや、何にもならないことだ)。」

解答

問1 A Ⅱうたあわせ B Ⅱはつかり

問2 ① Ⅱ完了・「たり」・連用形 ② Ⅱ過去・「けり」・連体形 ③ Ⅱ打消当然・「まじ」・連体形

問3 ① ㍿㍿

② ㍿カ行四段動詞「鳴く」の終止形または連体形に接続していることから、「断定」の助動詞「なり」か「推定・伝聞」の助動詞「なり」だが、「秋霧」の向うの鳴き声から「雁」だと推定していること。

問4 (二)

問5 品詞分解 ㍿音(名詞) / ㍿も(係助詞) / ㍿せ(サ変動詞「す」未然形) / ㍿ず(打消)の助動詞「ず」連用形) /

なり(ラ行四段動詞「なる」連用形) / ㍿に(完了)の助動詞「ぬ」連用形) / ㍿けれ(過去)の助動詞「けり」已然形)

口語訳 ㍿右方の歌人たちは、静まりかえってしまったという。〔解答例〕

問6 (ハ)

出典：『百人一首抄』／ 中央大学

現代語訳

わが庵は……私の庵は、都の東南（の方角にあつて）、（私はここで）このように（心静かに）暮らしている。（ところが）世間の人々は（ここを）俗世を憂^しとして住む宇治山だと言っているようだ

この歌は、だいたいにおいて、（意味が）明らかである。（世間の人々は）つらい宇治山と言っているが、私は（この場所に心安らかに）住むことができる、という気持ちの表現である。『古今集』『仮名序』に、「始めと終わりがはっきりしない」と言っているのは、*「世を宇治山と人はいへども」と表現するのがふさわしい歌を、「人はいふなり（＝世間の人々は言っているようだ）」と表現しているところをさして言うのである。「秋の月を見るに暁の雲にあへる」と書いているのは、一晩中、晴れている月（を見ているうち）に急に雲がかかってきたという情景を（たとえとして用いて）「始め終りたしかならず」と言っているのだ。一方、この雲のかかっている様子は、やはり微妙でおもしろいところがある。このことを考慮に入れて、この歌の意味を、理解しなければならない。

〔訳注〕

* 始めと終わりゝ――表現が不足気味なので一首の歌として十分に意が尽くされていない、歌の論理の筋道が確かではない、の意。

* 世を宇治山ゝ――世間の人々はこの場所を俗世を憂^しとして住む宇治山だと言うけれども、の意。

* 秋の月をゝ――秋の名月を見ているうちに夜明け方の雲におおわれた、の意。

解答

問1 東南 問2 私はこの場所でのように安らかに暮らしている

問3 「宇治山」の「宇治」に「憂し」がかけられている。

問4 C 問5 A

解説

問1 古典における方角は、「東・西・南・北」ではなくて、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥によって表される。いわゆる「十二支」である。アナログ式時計の表示（「文字盤」を想像してもらおう。12時（子）から11時（亥）までを十二支で均等に割り振ってゆくと子⇨北、丑寅⇨北東、卯⇨東、辰巳⇨東南、午⇨南、未申⇨南西、酉⇨西、戌亥⇨西北、となって方角が表されるのである。ちなみに地球儀などで南北に走る線を経線というが、別名を子午線ともよぶのはこの十二支に基づいている。

問2 現代語訳の問題。指示語「しか」が含まれており、「しか」に込められた作者の心境を明示することが条件とされている。現代語訳なので「住む」の主体（主語）も明示する。指示副詞「しか」は、上代（奈良時代まで）に多く用いられ、中古（平安時代）以降は、主に漢文訓読文に使われた。中古の和文では「さ」が一般的である。そのため、この「しか」をめぐる様々な解釈が行われてきたが、ここでは触れない。さて、ここは直ぐ後に「世を宇治（憂し）山」とあって「憂し（「つらい）」心情と世間の人は言うようだが、「しかぞー住む」すなわち、逆に「心安らかに」住んでいる、と読める。本文に「宇治山といへども、我は住み得たる」とある通りである。歌の上の句が、「ぞー住む」の係り結びで切れ、下の句との論理的関係が逆接になっているわけである。本文に「世を宇治山と人はいへども」とあるべき歌を『人はいふなり』といへる」とあるのは、このことを言っているのである。「憂し」は、周囲の状況が思うようにならず、気持ちがあふさいで嫌だと思ふ気持ちを言う。語源は「倦む（「飽きる・嫌になる）」。それとは、逆の、対照的な心情を表現する言葉をあげてみればよい。「心静か」「安らか」「心穏やか」「平安に」「落ちついて」「満ち足りて」など。なお、指示語を訳す場合は、まず指示語そのものを表現した上で具体的内容を付け加える訳し方（解答参照）が

好ましい。

問3 掛詞を説明する問題。「世を宇治山と」は、「世を」が格助詞で用言にかかっていく性質を持つことから「宇治山」という体言の中に用言の文脈「憂し」が見出せる。宇治という土地は、早くから俗塵を払い清める清遊の地とされ、貴族の別荘も多かった。この歌が詠まれたのは平安初期の九世紀後半、宇治がまだ浄土信仰と結びつく以前であるが、後世、十世紀後半から浄土教が流行すると、西方浄土を想像するのに格好の地とされた。十一世紀には、藤原頼通が、父道長の別荘を寺院に改築して平等院とした。『源氏物語』『宇治十帖』に、来世を志向する人々の愛と苦悩が描かれたのも十一世紀初頭であった。後世、浄土教の浸透とともに、この歌と作者は、宇治の隠逸の人（「志の高い、俗世間のめんどろな交わりをせず済むような環境に積極的に身を置く人」として、人々に理想化されていた。

ちなみに、地名の掛詞は少なからずあり、主なものをあげてみても「逢坂の関（逢ふ）」、「因幡（去なば）」、「松帆浦（待つ）」、「伊吹山（言ふ）」、「筑紫（尽くし）」、「宇佐（憂さ）」、「鳴海瀉（成る身）」など枚挙にいとまがない。

問4 傍線部の心情説明問題。「秋の月を見るに暁の雲にあへる」とは、すなわち比喻であって、これを和歌の特徴としてどのように説明すれば正しいかということである。「秋の月」は、月が一年で最も美しく見えるのが秋であるから、仲秋の名月のような、「すばらしい感興」のたとえであろう。「暁」は夜明け方のことで、美しい月を鑑賞し続けてきて最後の最後という時になって「雲にあへる（「雲におおわれてしまった）」というのは、「失望させられる」こと。これに該当するものはCである。「始め終りたしかならず」とあるのもそのためで、首尾の呼応のような統一感が、最後の表現の曖昧さによって惜しくも失われているという意味なのである。具体的には「世を宇治山と人は言へども」とあるべきところが「世を宇治山と人は言ふなり」となっていて、上句との論理的関係が明確でなく、その点が残念だといっているわけである。

問5 「此の歌の心」と書いたのは『百人一首抄』の作者であるが、「わが庵は」の歌がどのようであればよいといっているか、選択肢の中から選ぶ問題。前問までに見てきたように、『百人一首抄』の作者は「この歌は……宇治山といえども、我は住み得たるやうの心なり」と明確に言い切り、和歌の文末表現が「いふなり」ではなく「いへども」とあるべき（「理解すべき」だという。一方、

選択肢は全て口語訳の形であるから、逆接表現「いへども」に対応している「宇治山といつても」のAが正解ということになる。つまり「此の歌の心」が指しているのは「宇治山といへども、我は住み得たるやうの心」であるということだ。傍線(5)の前後の「これにて、……思ふべし」とは、直前にある「此の雲のかかりたるさま、なほかすかに面白き所あり。」によって、歌の内容を吟味すべきことをいう。すなわち、『古今集』「仮名序」に書かれたような「始め終りたしかなら」ぬところが、この歌の持ち味であり、逆接によって論理的に明快な歌の内容に奥行きを与えているというのである。いかにも中世的な和歌の解釈ということができ

4章

【問題】 【演習】

出典：『大和物語』の一節 / オリジナル問題

現代語訳

下野の国に（長い間）男と女が（一緒に）暮らし続けていた。長年暮らしていたうちに、男は、（新しい）妻をつくってすっかり心変わりをしてしまい、この家にあつたあらゆる物を、今度の妻のところへすっかりきれいに運びこんで行く。（もとの女の）女はつらいと思うけれども、やはりもとのように（男のするに）まかせて（自分は）見ていた。（男は）ちりほどのものも残さずにみな持って行ってしまった。ただ残っていたものは馬のかいば桶だけであつた。そんなことであつたのに、この男の従者で、真榭まぎといった（名の）童を使って、この馬のかいば桶まで取りによこした。この童に女が言った。「おまえももうここには来ないだろうよ。」などと言つたので、（真榭は）「どうして（ここに来てあなたに）お仕えしないことがありますか（、いや、お仕えします）。主人はいらっしゃらなくてもきつとお仕えしましょう。」などと言つて、立っている。女は「主人に（私が）お便りを申し上げたら、（おまえが取り次いで）申し上げてくれないか。（主人は）手紙はまさか御覧にならないだろう。ただ言葉で申し上げなさい。」と言つたので、（真榭は）「かならずきちんと申し上げましょう。」と言つたので、（女は）このように言つた。

「ふねも往ぬ……馬ぶね（＝馬のかいば桶）もいってしまふ、（その舟と縁の深い「榭」をその名前に持っている）真榭も見えなくなるだろう、そんな今日からはつらい世の中をどのようにして（舟が渡るように）渡つて（＝生きて）いったらよいのだろう（いや、舟も榭も私は失ってしまったのだから、そうしたら舟が漕いで行けないように、私もこの世を渡っていくことはできない）と申し上げなさい。」と言つたので、（真榭は、男にその通り取り次いで）言つたところ、ある物をすっかりきれいに運びこんで行つた、その男が、そのまますっかりと運び返して、もとのように他の女にはわきめもふらず（もとの女と）一緒に暮らしたということだ。

問1 (a) ㉖打消・「ず」・連用形 (b) ㉗存続・「たり」・連体形 (c) ㉘打消推量・「じ」・終止形

(d) ㉙推量・「む」・連体形 (e) ㉚存続・「り」・終止形

問2 ① ㉛「なむ」は、一語で係助詞（強意）。そのために文末を連体形「ける」で結んでいる。

② ㉜「なむ」は、二語。（連用形接続の）強意の助動詞「ぬ」の未然形「な」と、（未然形接続の）意志の助動詞「む」の終止形「む」が合わさったもの。

問3 2

問4 (1) ㉝男（あるいは、主・ぬし） (2) ㉞童（あるいは、従者・まかぢ）

(3) ㉟女 (4) ㊱童（あるいは、従者・まかぢ）

問5 5

問6 B ㊲4 C ㊳4

出典：『伊勢物語』の一節 / オリジナル問題

現代語訳

昔、男がいた。ある人の娘で（その親が）大切に育てていたのであったが、（その娘が）なんとかしてこの男に自分の気持ちをおもう（言いたい）と思った。口に出して伝えることが難しかったのだろうか、もの思いの病いになって、（もう）死んでしまうにちがいないという時に、「このように思っていた（＝あの男を恋い慕っていた）」と言ったのを、親が、聞きつけて、泣きながら（男に）告げたので、（男は）あわててやって来たけれども、（女は）死んでしまったので、（男は）ひとりもの思いに沈んで（家に）閉じこもっていた。（ちょうど）時は水無月の月末（のことであり）、たいそう暑い時分で、（男は）宵は詩歌・管弦の楽しみをして（心を慰めていたが）、夜が更けて、やや涼しい風が吹いてきた。蛍が高く飛びあがっていく。この男は、（その蛍を）見て横になって（次のような歌を詠んだ）、

ゆくほたる……空に飛び上がっていく蛍よ、おまえが雲の上まで行ってしまふことができるのなら、（地上ではもうまもなく秋になり）秋風が吹くと、（秋になるとやってくるはずの）雁に告げて来い

暮れがたき……暮れそうでなかなか暮れない夏の日の一日中、（あたりを）もの思いにふけて眺めていると、何という理由もないのにも悲しいことだ

解答

問1 (a) 〓 大切に育てる (b) 〓 ひとりもの思いに沈む (c) 〓 月の終りの頃・月末

(d) 〓 詩歌管弦の楽しみをする (e) 〓 何という理由もない

問2 (1) 〓 親（または、人） (2) 〓 男 (3) 〓 むすめ (4) 〓 男

問3 (ア)Ⅱなんとかしてこの男に自分の気持ちを言おう(言いたい)

(イ)Ⅱ雲の上まで行ってしまふことができるのなら(行ってしまふものなら)

問4 「むすめ」が「男」を恋慕していたこと。(20字・解答例)

問5 時は陰暦六月の月末で、夏から秋に季節が移り変わろうとする時であり、それを、それぞれの季節を代表する「ほたる」と「雁」とで表しているから。(68字・解答例)

解説

問1 (a)～(d)どれも重要古語である。(e)は慣用句であり、少し難しかったかもしれないが、前後の文脈から意味を考えていってほしい。と。「大切に育てる・大切に世話をする」。この場合は娘だから「大切に育てる」が適当。「大切に」という部分が重要である。

(b)「つれづれ」は、「(することもなく) 所在ない・手持ちぶさたである状態」を表しているが、そこから、心が満たされず、「ひとりもの思いに沈むさま」もいう。この場合は文脈を考えて「ひとりもの思いに沈むさま」が適当。「つれづれなり」で形容動詞。本文のように「つれづれと」になっているときは、それで一語の副詞とする。

(c)「つごもり」は、月の終りの頃、もしくは最終の日のこと。この場合は、最終日と限定せずに、月の終りの頃・月末と、少しだけ幅をとってとらえたほうがよい。

(d)「遊び」は、「詩歌管弦の宴」である。ふつう「遊び」で名詞だが、(d)は、バ行四段活用動詞「遊ぶ」の連用形。本文の場合、男はひとりだけであるから「宴」とするのはちょっとおかしい。ひとりで歌を詠んだり楽器を弾いたりしているのであるから、「詩歌・管弦の楽しみをする」とするのがよい。

(e)「そのこととなし」は、それだと決めつけられる理由がない、ということ。「何という理由もない」。

問2 傍線部が連続していて、主語がコロコロと変わっていくことが予想される。

主語を決めていくためにはまず、どこかにしっかりとした定点を置くことだ。本文の場合だったら、「親、聞きつけて」の「親」が定点となるだろう。「親」の他に登場する人物は「男」と「むすめ」である。

主語は、接続助詞「て」の前後では変わらないが接続助詞「ば」（や「ど」）の前後では変化することが多い、という傾向も知っておくと便利だろう。

「聞きつけ」の主語は「親」。「聞きつけて」とあるから、その後の「泣く泣くつけたりけれ」の主語も「親」である。「ば」で主語が変わっていると考えると、「まどひ来たりけれ」の主語は「男」か「むすめ」である。「むすめ」は病気でふせているのだから、やってくるわけはなく、「まどひ来たりけれ」の主語は「男」だと決まる。その後の「ど」で主語が「男」から別の人物へと変わっている。今度の主語は「親」か「むすめ」であるが、「死にけれ」とあるから、病気であった「むすめ」が主語だと見当がつく。そして、また「死にければ」の「ば」で主語が変化しているのではないかと考えていく。残ったのは「親」と「男」であるが、これは前の「あわててやって来たけれども、死んでしまったので」という文脈から判定して、「男」の方が適当だと決まるのである。

接続助詞「て」の前後で主語は変わらず、接続助詞「ば」や「ど」の前後では変化する、ということ鉄則のように鵜呑みにしてはいけない。あくまでも傾向であり、ひとつの目安なのであると考えてほしい。主語の確定問題は、文脈の正確な把握が必要不可欠なのである。

問3 (ア)を品詞分解すると、「いかで／この／男／に／もの／いは／む」となる。

まず、「ものいはむ」の下に引用の「と」があることに注意する。ここから「いかでこの男にもいはむ」の部分は、カギ括弧をつけて考えるべきことがわかる。つまり「いかでこの男にもいはむ」は、「むすめ」が思ったこと、その内容であるわけだ。

次に、カギ括弧の中にある「む」について考えていく。主語は何だろうか。カギ括弧の中で考えていくわけだから、主語は「私」である。カギ括弧がつけられて、主語が「私」であるのだから、「む」の意味は《意志》である。「私は男に自分の気持ちを言おう」ということである。

さらにおさえなければならぬのは、疑問詞「いかで」と《意志》の「む」が併用されていること。「いかで」は「ドウシテ」

といった意味であるけれども、疑問詞が《願望》や《意志》を表す語とともに用いられているとき、それは疑問の意味ではなく、「ナントカシテ・ドウニカシテ」という意になるのである。

(イ)は品詞分解すると「雲／の上／まで／いぬ／べく／は」となる。

まず、ナ変動詞「いぬ」をしつかりと見抜くこと。「べくは」は「―するものならば・―することができるならば」の意を表す。

問4 「いかでこの男にもいはずと思ひけり」という「むすめ」の心内の表現がポイント。「むすめ」の言葉を聞いて、「親」が「男」のところにかけていることも参考になる。

問5 本文中に「時は水無月のつごもり」とあることに注目。月の異名がしつかり覚えられているか、確認しておきたい。水無月は（陰暦）六月。（陰暦）六月の季節は何だろうか。現代の六月の感覚とは大きくずれているけれども、古文の世界での六月は夏である。一年十二カ月を春夏秋冬の四つで分けてみればすぐに気づく通り、一・二・三月〓春、四・五・六月〓夏、七・八・九月〓秋、十・十一・十二月〓冬、である。

「水無月のつごもり」というと、もう夏の終り、すぐそこまで秋がやってきているというときなのである。ここに気がつけば、夏のものである「ほたる」が空高く飛んでいって、秋のものである「雁」に「秋が来る」と告げるのも納得できよう。季節の交替を、それぞれの季節を代表する生き物の交替で言っているのである。

なお、空に昇っていく「ほたる」には、はかなくして死んだ「むすめ」の魂が託されていると考えることもできる。

5章

【問題】(演習)

出典：『後漢書』「陳寔列伝」／ 明治大学

書き下し文

時に歳荒れて民儉なり。盗有りて夜其の室に入り、梁上に止まる。陳寔陰に見、乃ち起ちて自ら整払し、呼びて子孫に命じ、色を正して之に訓へて曰はく、「夫れ人は自ら勉めざるべからず。不善の人も未だ必ずしも本より悪ならず、習ひ性と成り、遂に此に至る。梁上の君子は是れなり」と。盗大いに驚きて、自ら地に投じ、稽顙して罪に帰す。

現代語訳

ある年、凶作になり人びとは苦しい生活をしていた。盗人がいて、ある夜、陳寔の部屋に入り梁の上に隠れていた。陳寔は(その盗人を)ひそかに見つけ、そこで、自ら起き上がって居ずまいを整え、子や孫を呼びあつめ、表情を正した上で教えて言ったことには、「そもそも人は自分から善い人になろうと自ら努力しないわけにはいかない。善くない行いをする人も必ずしも最初から悪人であったというわけではない。(悪い行いを)繰り返すうちにその習慣がその人の性質のようになり、遂に悪人の境地に至ったのである。梁の上にいる君子(＝高德の立派な人物)がちょうどその人である」ということだ。盗人はたいへん驚いて、自ら地面に降り、深い礼をして罪を認め、どんな罰でも受け入れると謝った。

解答

問1 いまだかならずしももとよりあくならず

問2 ①

問3 盗

問4 ④

問5 ②

出典：『老子』第七十八章 / オリジナル問題

書き下し文

天下水より柔弱なるは莫し。而れども堅強を攻むる者、之に能く勝る莫きは、其の以て之を易ふる無きを以てなり。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つは、天下知らざる莫きも、而も之を能く行ふこと莫し。是を以て聖人云ふ、「国の垢を受くる、是れを社稷の主と謂ひ、国の不祥を受くる、是れを天下の王と謂ふ」と。正言は反するがごとし。

現代語訳

この世の中すべてに、水よりも柔らかくて弱いものはない。それなのに堅く強いものを攻め落とすこと（＝岩石のように堅く強いものを流したり砕いたりすること）には、この水にまさることのできるものはないというのは、水がその本来（の性質である柔弱さ）を変えることがないからである。（この）弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが堅いものに勝つということは、この天下に知らない人はいないが、これを実際に実行できるものはいない。そこで聖人が言うには、「国家の恥を身に引き受ける人を国家の主人と言い、国家の不幸を身に引き受ける人を天下の王と言う」と。（本当に）正しい言葉は、（一般の人の考えとは）反対のようである。

解答

問 1 ① 天下（に）水より柔弱なる（は）莫し。

② 〓この世の中に、水よりも柔らかく弱いものは存在しない。〔解答例〕

この世の中で水が最も形を変え易く力のない存在である。〔別解例〕

問 2 (b) 〓水〔本文1行目〕

(d) 〓弱之勝強、柔之勝剛〔本文1～2行目〕

問3 この世に、弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが固いものに勝つということを知らないものはないが、〔解答例〕

みんな、弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが固いものに勝つということを知っているが、〔別解例〕

問4 正しい言葉は、一般の人の考え（普通の考え）でも可）と、異なるようである。〔解答例〕

解説

問1 このような問題での基本的な解答手順と実際の方法は、次のようになる。

(1) 熟語を括る。(漢文の文構造では、熟語は一語と同等の扱いだから。……〔例〕 読_二史記。↓読_レ〔史記〕。↑読_レ書。

〔天下〕莫_三〔柔弱〕_二於水_一。

(2) 文字の位置から、その文字の文中での働き（主語・述語・目的語・補語）や文の構造（句形）を考える。この時の着眼点として、『助字』が重要。また、返り点があれば、文の構造を考える際の大きなヒントになる。なお、文字の読みについては、文章の他の部分に同じ文字があつて、そこに送りながが付いている場合もあるので注意を向けてみよう。

〔天下〕莫_三〔柔弱〕_二於水_一。

「於」から「莫」に返っていないので、この「於」は『場所を示す助字』ではないとわかる。すなわち、「〔天下〕莫_レ（柔弱）_二於水_一」という文の構造と考えられる。

「莫」は「無」である。これは、傍線部(c)以降の「天下莫_レ知_レ、而莫_レ之能行_二」の読みからも確認できる。この「莫・無」は、「A莫_レ（無）_レB」という文構造を作り、Aに『場所を表す名詞』、Bに『主語』がくる。したがって、傍線部は、「天下」が『場所』で、「柔弱」_二於水_一」の部分に『主語』になる。そこで、「天下に『柔弱』_二於水_一莫_レし」と読むことになるが、同文型の傍線部(c)で「に」を略しているのだから、これに合わせてもよい。

さて、「〔柔弱〕_二於水_一」の部分であるが、「柔弱」は「柔らかい」と「弱い」で、共に形容語だから、この二つが合わさると「柔弱ナリ」と形容動詞で読む（口語でも「柔弱だ」と形容動詞になる）。すると、ここは「形容動詞_二於名詞_一」という形で『比較』を表している。その場合、「形容動詞_二於名詞_一」と読むから、「〔柔弱〕_二於水_一」となる。この部分は「莫」の『主語』なので、『名詞句』だから、「柔弱ナリ」は連体形で読む。

以上のことから、最終的には、「天下莫^ム柔弱^ニ於^ル水^ノ」(「天下水より柔弱なる莫し」と読める。なお、この文は提示文なので、主語に提示の「は」を補ってもよい。したがって、次の四種八類の読みが正解となる。

「天下(に) 水より柔弱なる莫し」「天下(に) 水より柔弱なるは莫し」

「天下(に) 水より柔弱なるもの、莫し」「天下(に) 水より柔弱なるもの、は莫し」

(3) 右の作業で捉えた文型を参考に、漢語を日本語に置き換えれば『直訳』になる。

「天下(に) 水より柔弱なるは莫し」

「天下に」≡「世の中」。「水より柔弱なるは」≡『比較構文の主語』で、「水より柔らかく弱いものは」になり、「莫し」≡『述語』で「ない」。よって直訳は、「世の中に、水より柔らかく弱いものはない」となる。

この設問では、右の答えで最低限意味が通るので、『直訳』レベルの答えとしては一応合格である。けれども、ここでは、更に深く、どういう表現なのかを解釈してみよう。

まず、ここで言う「世の中」であるが、これは、この文章の書かれた時代、つまり、その時点での「世の中」を指している。しかし、だからといって、筆者の感覚で「現在の世の中に」と訳すと、「現代日本の世の中に」と捉えられてしまうおそれがある。そこで、「その時点での」に当たる、「この」という指示語をつけて「この世の中に」という冒頭で書き始めればよい。こうすると、時代をぼかすことができる。

次に「水より柔らかく弱い」だが、ここで、比較しているということは、前提として「水」も「柔らかく弱い」ものだと捉えられていることになる。

しかし、「水」が「柔らかい」というのは、実質的にはおかしな表現だ。現代の日本語では「水」に対して「柔らかい」とは使わない。「柔らかい」は「固体」に対して使うのが主で、そこから、その性質を敷衍的に「無形物」に伸ばして、例えば「柔らかい声」「柔らかい態度」と使う。そこで、これらから共通性を探すと、「変化に富む」ということが考えられる。確かに「水」は「変化に富む」ものである。別の漢文においても「水従^ニ方^ニ円^ニ」(「水は方円に従う→水は四角い容器でも丸い容器でも入れた容器の形通りになる」という言葉があるが、このことを「柔らかい」といっている。

次の「弱い」は、後に出てくる「堅強」との対比から、文字通り「弱い」の意味で使われているようだ。「弱い」というのは、「力のない」ことを言う。ただし、ここでの意味は、「パワーがない」というよりむしろ、「意志が弱い」「彼女に弱い」という場

合に近い。前者は、「意志の力がない」ことであり、後者は、「彼女に対して力がない」ことであるが、両者に共通するのは、「ガンとして押し通せない」ということである。つまり、「弱い」とは、「すぐに言いなりになってしまうさま」のことである。こう捉えると、「柔らかい」⇨「変化に富む」ということと整合性が取れているとわかる。

すなわち、「柔」も「弱」も実は同じ意味なのである。「柔弱」は同義語を重ねた熟語で、「一つの姿勢や一つの姿を押し通すことができず、すぐに変わってしまう」ことを表している。

さて、最後に、「～より……であるものはない」を言い換えてみよう。ここで「天下に」において「水より」「ない」のだから、この比較文は、「世の中のもの」全部と「水」とを比較しているとわかる。この「多対一」の比較における否定文は、結果として『最上級』になる（英語で似たようなことを習ったはず）。現代語においても同じ。例えば、「このクラスには、彼より背の高い人はいない」は、「彼は、このクラスの中で最も背が高い」に等しい。

以上からこの文は、「この世の中では水が最も、すぐに一つの形を貫き通せず、あつという間に形を変えてしまい易いものである」と言っていると判断できる。

ちなみに、傍線部が、「水不三柔二弱於水」であったら、これは、一対一の比較文の否定形である。否定辞が「莫（無）」ではなく「不」になる点に留意。「水は水より柔弱ならず」と読み、「水は水より形を変え易くない⇨水の方が水より形を変えやすい」と訳せる。

なお、次の一文の、「水」が「無二以易一之」（⇨そのことによって、これを変えることがない）と言っている「之」は、「形」に対する「質」である。つまり、「性質・本質」が変わらないのである。この二文において、何が変わり何が変らないのかをしっかりと識別しないと話が見えなくなるので要注意。

問2

漢文の「之これ」という指示語は前しか指さない。しかも、直前に出てきたものを指す場合が殆どであることを覚えておくとよい。

(b)⇨この冒頭の「而」を逆接の「しかレドモ」と読んでいる点に着目し、ここに逆接の接続語が置かれている理由を考えた人は、簡単に答を見つけられたはず。直前の文では「水」が最も「柔弱」であると述べている。この部分は、「堅強」を「攻める」もので「之」に「勝る」ことのできるものはない、と言っている。つまりここでは、「之」は「堅強」に「勝る」ことができると言っているのである。すなわち、この逆接の「而」は、「之」が常識的に考えると「堅強」に負けるべきものであるから付けられている

るわけだ。よって、ここの「之」は、「堅強」と対極にある「柔弱」なものでなければならぬ。直前において、「柔弱」なものは「水」だと述べられているので、「水」が答になる。これが「世の中」で最も柔弱であると言っているのだから、「堅強」に勝てるのは、どう考えても常識ではそうならないだろうという推測が立つ。なお、「堅強」というのは、「どっしりと構えていて、ちょっとやそつとはびくともせず、決して形の変わらないもの」という意味である。

(d) ≡ この「之」の用法は、しっかりおさえておいて欲しい重要な用例である。これは英語で言うところの「仮主語の『It』の漢文バージョンである。結果から先に説明しよう。次の句形を覚えておくようにしよう。

A、B、C、D、E、F、M。 ≡ C、D、E、F、M、A、B、之。 (*Aは主語、Bは述語、C、D、E、F、Mは目的語。Aがない場合もある。)

一文の中で『目的語』などが長い場合、尻(≡文末)が重くなる。漢文は、これを嫌う。そこでこの長い『目的語』などを、提示句のような形で、文頭に持ってくるのである。

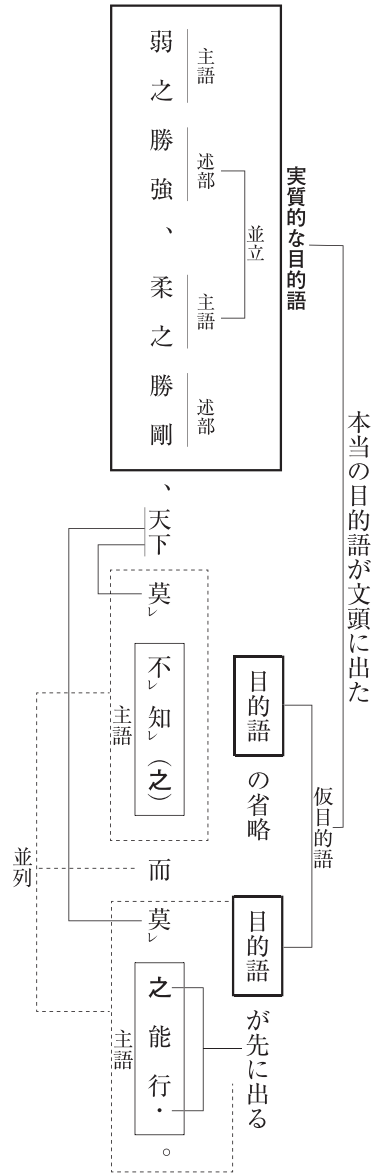
「A、B、C、D、E、F、M。」の文で、目的語「C、D、E、F、Mを」は、文頭におくと「C、D、E、F、Mは」と、「を」から「は」に読み変えられる。そうすると、「主語A—述語B(≡AはBす)」が残るが、このままだとこの部分には、『目的語』がない形になってしまう。そこで、冒頭に移動させた『目的語』を指示する「之」を目的語として仮に置く。つまり、「Aは、これ(≡C、D、E、F、M)をBす」という形を採る。すると、「A、B、之」の部分も、きちんとした文の構造を採ることができる。

なお、次に示す二つの句形に注意しておきたい。①はこの文型で、②は目的語が前に出ただけの『倒置文型』である。

① C、D、E、F、M、A、B、之。

② C、D、E、F、M、A、B。

ここの傍線部の文の構造は、次のようになっている。



これは元々、「天下莫_レ不知_二（弱之勝強、柔之勝剛）_一」と「天下莫_レ能行_二（弱之勝強、柔之勝剛）_一」の並立文である。これを接続の助字「而」が繋いでいる。始めの文を訳すと、「世の中で、力なき者が力ある者より優れていることをわかっていないものはいない」で、次の文は「世の中で、力なき者が力ある者より優れていることを行うことができる者は（ことは）いない」となる。これは、「みんなわかっていないのに、そうは言っても、誰もできない」という内容なので、日本語で考えたときは、『累加の逆接』になる。だから、「_レ莫_レも、_レしかるに……莫_レし」と読んでいるのだ。

この二文を『結合法則』で結びつけると、共通因数の「天下」が先に出て、「天下（莫不知_レ＋莫能行_レ）」となる。また、目的語も共通因数で最も大きなもので、文頭に持ち上げると、「（弱之_レ勝剛）_二天下（莫不知_レ＋莫能行_レ之）_一」という形になる。ここで、「不知之」の「之」は略しても差支えはない（＝読者に誤解を与えない）ので略してしまいが、「能行之」の「之」を略すと「行」が「行く」の意味と紛らわしくなるので、この「之」は残しておく。すると、「弱之_レ勝剛、天下……、而莫能行_レ之」という形になる。否定文中の目的語を示す代名詞「之」は動詞の前に移動するという癖から、「能行之」が「之能行」となって本文の形になる。

なお、傍線部(b)の「莫_レ之能勝_レ」も、本来の語順は「莫_レ能勝_レ之」なので要注意。この「之」が動詞の先に出ているのも、否定文中の目的語を示す代名詞「之」は、『動詞の前』に移動するという癖のためである。

問3 右の問2を参照のこと、ポイントは、「不知」は「知らない者」を意味すること、「知」の『目的語』の「これ」が略されているので、訳すときに補うこと、傍線部分の末尾は『逆接表現』で結ぶことの三点である。直訳は「世の中において、(これを)知らない者はないが」である。これを端的に言うには「だれもが、それを知っているが」と、肯定表現にひっくり換えればよい。そうすると「そんなことは、みんな知っているが」になる。

問4 これは、かなり難しい問題だったかも知れない。この「反」の補語、つまり「何と」は、文型や文脈から得られるのではないからである。何によって把握されるかというと、それは、解釈、ただし口語訳レベルの解釈ではなく、前後の文脈を把握し、それらと傍線部のつながりを考えての解釈である。その際、視点の切替え、発想の転換、連想などが必要となろう。

設問文での要求は三点で、①「何が」＝『主語』を補え、②「何と」＝『補語』を補え、③「訳せ」である。まずこれをちゃんとおさえること。

そこで傍線部を見る。最初に『訳』を出すべきだろう。傍線部④には訓点が付いているので、訳の作業の八割は提示されているようなものだ。ここは書き下すと「反するがごとし」である。

「ごとし」は、比況の表現で、「くのようだ」。この「若し」の根本義は、「AはBに似ている＝一見すると同じに見える」と、事物象を直感的に捉えた意識を示す。ゆえに、この否定「不_レ若_ク(＝くにし_カず)」は、「一見したところで違って見える＝月とすっぽん」の意味になり、「く」に及ばない、くのほうが断然よい」となる。

「反」は、「反する」と読んでいることから、『動詞』である。「反」は対立の意を示す。「正反対」の様である。つまり「一八〇度違うこと、逆であること」を意味する。「反」と「逆」の違いは、前者は「対立するものが同時に存在しているさま」で、「背く」に当たる。「逆」は、「対立するものが入れ替わっているさま」で、「逆転」に当たる。

そうすると、「若反」は、「何かは、何かと、一見すると一八〇度違って、逆になっていることと同じに見える」と考えられる。これを言い換えれば、「何かは、何かと、一見すると正反対に見える」ということになるはずだ。

傍線部の意味が捉えられたので、次は『主語』と『補語』だ。『主語』は、傍線部の直前に提示されている。「正言若反」とというのが一文だから、「名詞(＝正言) + 助字(＝若) + 動詞(＝反)」という構造しか考えられないし、訓点もそう読んでいい。よって、「何が」は「正言は」である。これは、本文下の(注)から「真理を述べたことば」とわかる。これを先の訳に代入する

と、「真理を述べたことばは、何かと、一見すると正反対に見える」というように捉えられる。

ところでこの「正言」とは何を指すのだろうか。ここで述べられている言葉は、ただ一つ。直前の「聖人云」の後にある「受_三国_一之_レ垢_一、_レ是謂_三天下王_二。」しかない。つまり、これ自体が「正言」なのである。

おそらく、「正言」が直前の「聖人のことば」を指しているのと取れず、直前の「聖人のことば」を『補語（「何と」にあたる語）』と見て、「真理を述べたことばは、聖人の言った『受_三国_一之王』ということばと正反対に見える」と答えた者がいるだろう。しかし、これは×である。何故なら、この誤答のような意味ならば、「正言若_レ反」には、前にある「聖人のことば」を『補語』として取り込むための語句、つまり指示語が必要となるからだ。言い換えれば、この一文が「正言若_レ反_レ之」（「正言はこれと反するがごとし」となっているならば、この誤答のような意味だと考えられる。しかしここでは、その「之」がない。だから、「正言（「真理のことば）」は、直前の「聖人のことば」のことであり、「聖人の言った『受_三国_一之王』という真理を述べたことばは、正反対に見える」という意味になると考えられるのである。

ではいったい、『補語』は何か。ここで、「反」の意義を思い出して欲しい。これは「対立」を示すのだから、「聖人のことば（「真理のことば）」と問題の「何か」が対立していることになる。そうすると、当然、この「何か」の実体は、「ことば」でなければならぬ。次に「聖人」と対立するものを探す。すると、「聖人云」の直前の「是以」という語句が目に入る。この二語は「これによって」という理由を示す。すなわち、「聖人」が「真理のことば」を述べた動機が「是」で示されているわけだ。「是」はもちろん、直前の一文「弱_レ之_レ能行_一」を指している。つまり、「世の中にできる者がいないから、聖人は『受_三国_一之王』と言った」のだと判る。よって、「聖人」と対立するのは「天下」と判る。ゆえに、この「何か」は、「天下之言」、つまり「世間一般の人が言っていることば」である。

したがって、これを先の解釈に代入すれば、「聖人が言う真理を述べたことばは、世間一般の人が言っていることばと正反対に見える」という意味になる。これが答だ。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--